

# 論文の内容の要旨

論文題目 戦後日本における朝鮮人美術家たちの表現の模索——1945年から1962年まで

氏名 白 凜

在日朝鮮人美術家の作品は、そのテーマをとっても描かれた背景をとっても、彼らの生活や歴史、社会状況と切り離すことができない。彼らは美術家としていかに描くべきか、在日朝鮮人としていかに生きるべきかを考え、時には苦しみ悶えながら作品を作っていた。

本論文では特に、彼らの集団的活動に焦点を当て、これまで研究が進んでこなかった1950年代の動向と美術作品に注目する。戦後日本に生きる朝鮮人美術家は、どのような作品を作り、どこで発表していたのだろうか。制作と発表の過程で、彼らが見出したものは一体何だったのだろうか。

第一部「戦後日本に生きた朝鮮人美術家たちの足跡」は歴史編である(第一章～第三章)。第一章では朝鮮人美術家らの活動を整理した。植民地支配からの解放後、日本に住んでいた朝鮮人美術家たちは、互いに探し求め、自らの進む道を模索し、1953年に在日朝鮮美術会を結成した。彼らが主催した初めての展覧会である巡回展(1956年開催)を機に、何をどのように描くべきかを討論し始めた。1954年ごろから金昌洛が民族と創造について考えており、1956年に在日朝鮮美術会として「民族美術の創造」を創作の目的とした。彼らにとっての「民族美術の創造」とは、かつては失われた祖国であるが、今はそれがあるということ、境遇を同じくする在日朝鮮人に伝えることであった。目的が定まると制作が活発になり、1958年頃からは積極的に作品を発表した。発表の場は、建国10周年記念展(1958

年)などの朝鮮人美術家らが自主的に開催した展覧会、日本アンデパンダン展(1950年代初期から出品)などの日本人美術家主催の展覧会、日本人美術家と共催した日朝友好美術展(1960年に第一回展)、民団系美術家と総連系美術家が共催した連立展(1961年に二度)があった。

第二章では、活動の中で出会った日本人美術家との関わりに注目した。朝鮮人美術家らは、行動美術展、日本青年美術家連合、日本版画運動協会、日本労働漫画倶楽部など日本の公募展やグループに属しながら研鑽を積んでいたのだが、中でも日本美術会主催の日本アンデパンダン展へ出品し続けたことは、彼らの創造活動に少なからぬ影響を与えた。自らを一つの集合体であると意識し、その自覚を強く意識し始めた時、美術を封建制度や因習から解放し、民主的美術文化を創造するという趣旨で活動する日本人美術家たちに期待を寄せていた。日本アンデパンダン展という毎年開催されていた無鑑査の展覧会は、朝鮮人美術家らにとって、活動推進の大きな原動力となっていた。また、本稿では1960年4月19日に開催された日朝友好美術展にも注目した。同展は、日本アンデパンダン展で知り合った美術家らと共に開催した展覧会であり、美術を通しての交流を目的としていた。第1回展は川崎駅ビルで開催された。展示された作品には、川崎の朝鮮人集住地を直接訪ねて描いたものもあり、当時のルポルタージュ絵画の影響も見受けられる。

第三章では、日本において政治的立場を異にする朝鮮人美術家らの接点について、1961年の連立展に注目し、彼ら何を求めていたのかを解明した。日本に住む朝鮮人は朝鮮半島の南北に分断国家が樹立したことを機に対立していたが、1960年の4.19革命を機に互いに接近した。美術家らは同年年末に共に忘年会を、翌年には新年会を持ち、共同で展覧会を開催することとした。1961年5月に第1回連立展を、8月に第2回連立展を開催した。前者は5月に東京銀座の村松画廊で、後者は8月に銀座画廊で開かれた。参加団体は文芸同在日本朝鮮文学芸術家同盟、白葉同人会美術部、コリア美術家協会(第2回は韓国芸術家協会)の三団体であった。在日朝鮮人文化人たちの活動が盛り上がりを見せていた時期に開かれたものであり、当時の新聞記事を見ると、『民主新聞』、『朝鮮新報』で取り上げられ、南北では『京郷新聞』及び『労働新聞』に文化祭の情報とその意義について書かれた記事が掲載され、在日朝鮮人の文化活動の隆盛に対する理解と連帯の意思が表れていた。『白葉』に掲載された座談会からは、イベントを通して素朴な感情のやり取りがなされたことに、参加者らが喜びと希望を抱いていたことが窺える。美術作品については、第1回展では具象と抽象の差が見受けられたが、第2回展では一定の歩み寄りがあったようである。同展の特徴は、順位を競うものでもなく、賞が設けられたものでもなく、また共通した画風を持つ美術家たちの展覧会でもないという点であった。朝鮮半島の平和的統一と南北交流を願う朝鮮人美術家という部分のみが、この展覧会に出品した美術家たちの共通項である。視覚に訴える芸術作品に重点がおかれるのではなく、むしろ作品を提供している人の間に共通点があるという状況が、当時の在日朝鮮人に希望を与えていた。

第二部「制作と討論、批評の中で」は造形編である(第四章及び第五章)。第四章では、

前半で彼らの活動の中心にいた美術家である金昌徳、宋英玉、全和凰の作品を、後半では何をどのように描くのかの論争と関わる白玲と成利植の作品を分析した。在日朝鮮人の美術家の中心人物であった金昌徳「貧しい生活」は彼の温かい人柄が表現されている。宋英玉「三面鏡」は祖国の分断と揺らぐアイデンティティが表現されている。全和凰の「カンナニの埋葬」は民族の悲劇を描き続けた彼の代表作である。白玲の「無題」は武蔵野美術学校在籍時にシュールレアリスムに傾倒した時の様子を垣間見せる作品である。一方「私も祖国へ」は社会主義リアリズムへ画風を変えた後の作品である。成利植の「風景」は写実的に描く作家に囲まれながら抽象表現を取り入れていた成の様子を伝える作品である。

第五章では、何をどのように描くのかの論争の末に制作されたテーマ作について述べた。「在日朝鮮人の生活」というテーマで描かれた韓東輝、表世鐘、「帰国」をテーマにした許燠、金熙麗、「南朝鮮の救国闘争」をテーマにした韓宇英、李哲州、朴日大の作品を扱った。韓東輝の作品「朝鮮人部落」は第一章で述べた第一回日朝友好美術展に展示された作品で、川崎の朝鮮人集住地が舞台である。表世鐘の作品「来年は僕たちの学校へ」は就学前の幼い子どもを描いた。両者とも1950年代末の朝鮮人の生活を丹念に描いている。許燠の「帰りたい祖国へ」は迫力ある構成、一方の金熙麗の「帰国歓送」は柔らかなタッチで当時の様子を伝えている。韓宇英、李哲州、朴日大の作品は韓国の4.19革命を描いたものである。第四章と第五章で取り上げた13点の作品一点一点を丹念に見ていくと、それぞれが実に個性的だということが明らかになった。このような豊かな作品群は、第一部で述べた集団としての活動と離れて制作されることはなかった。

第六章では漫画家の全哲に注目し、活動と造形分析を行なった。まず約半世紀の活動期間を4つの時期に区分し、その特徴を整理した。次に代表的キャラクター（トルトリ、オンドルリョンガム、イプニ、ハンギョレソンセン）を選定し、脇役や生活環境、朝鮮語の理解度に分けてさらに詳細に分析した。これに加えて、聞き取り調査を通じて明らかになった全哲の生い立ちを整理した。また、エッセイや手紙から彼が朝鮮半島に笑いの花を咲かせることを夢見ながら描き続けていたことも明らかにした。以上のように第二部では、第一部で述べた活動がどのように具体的に作品に表現されたのかを明らかにした。

第三部「朝鮮人美術家の美術活動にかかわる文字記録と口述記録」は記録編である（第七章及び第八章）。第七章では文字資料、特に在日朝鮮美術会及び在日日本文学芸術家同盟美術部の機関誌『朝鮮美術』に着目し、解題の形で提示した。第一節では第1号、第2号、第3号の分析を通して、1953年から1954年までの活動内容を明らかにした。新たな美術組織である在日朝鮮美術会を結成し、世界情勢を把握し、世界の美術動向に関心を寄せていたことが分かった。第二節では第5号と第6号を分析し、1956年から1959年までの活動内容を整理した。本稿第二章で明らかにした、朝鮮人美術家と日本アンデパンダン展との関係が詳しく記録されている第5号、「民族美術の創造」についての討論を記録した第6号を分析し、日本アンデパンダン展が彼らの活動の中心にあったこと、「民族美術の創造」という目標に向けて制作が活発化したことを確認した。第三節では第7号を分析した。1960年

前後の多岐にわたる活動内容が記録されていた。

第八章では、筆者のこれまでの約 50 回にわたる口述記録を整理した。聞き取りで得られた情報をもとに、在日朝鮮人の美術研究においてこれまで手薄になってきた、45 年から 50 年代の美術家たちの活動を整理した。第一節で在日朝鮮人の美術研究についての概要を述べ、第二節では関東の、第三節で関西の活動を整理した。口述によって明らかになった重要なポイントは、美術家になることを目指していた彼らが、異国で孤軍奮闘していたのではなく、美術と民族という共通項で紐帯を求め、集っていたという点である。在日朝鮮人の美術研究がこれほどまでに遅れているのは、意図的ではないにせよ、存在の重さ／軽さが、マジョリティの側から測られてきたからであり、結果として忘却のプロセスに投げ込まれてきた。だが歴史は、選ばれし者たちだけの歩みではない。忘却の流れに抵抗し、伝承と記述を待っているパズルのピースを、語りから拾い出すことは、美術史研究の範囲だけに収まらない課題であると結論付けた。

今後の課題は、①第一部で出てきた「社会主義リアリズム」を始めとする用語を整理すること、②団体との関わりを精査すること、③日本における朝鮮人の美術教育史を解明すること、④美術作品の造形分析を、美術様式の影響関係を探りながら深めること、⑤文書資料及び口述資料を更に整理することである。